

子しいわ曰おのれく、己かに克れいちて礼ふを復じんむを仁なと為いちじつこっきふくれいす。一な日よ克ひと己よ復よ礼よせ  
ば、天てん下か仁じんに帰なせん。仁おのれを為おのれすは己よに由ひとる。人よに由よらんや。  
礼れいに非あらざれば視みる事こと勿なれ。礼れいに非あらざれば聴きく事こと勿なれ。礼れいに非あらざ  
れば言いう事こと勿なれ。礼れいに非あらざれば動うごく事こと勿なれ。

【大体の意味内容】先生はおっしゃった。「ちっぽけな自己の殻を打ちこわし、真心の働きと

いう「礼」にもどること。それが、「仁」すなわち命の琴線が奏でる癒しの旋律を、廣大無辺

に響かせることになるのだ。あなた一人でも一日「克己復礼」することで「仁」をなせば、天下

つまり宇宙そのものが「仁」に癒される。そうした「仁」を成してゆくために「自己の殻」を

壊すのも、やはり「己」という内側からの力に由らなければならぬ。誰か他人に、「自己の

殻」を破ってもらえるわけではないし、そのような甘えた期待は捨てるべきだ。「礼」とは、知

られるのが恥ずかしくなるほど無邪気で素朴な自分の本音本心であり、本源的な生命運動である。

それを見えるように整えていく努力が、広い意味での「礼儀」となる。カッコつけて型を崩し

た自分の「失礼」な姿などに見惚れてはならない。自分の本心を偽る「非礼」な声を聴く必要

はない。自分の品位を貶める「無礼」なことばを他人に言っはならない。なんとしてもせず

にはいられないという「原動力」が認められない「虚礼」の事業に、命がけの行動を起こす

意義はない。」

「口」というのは、かたくなに外からの刺激を拒否しようとして殻を作ることもあれば、その殻を破  
って大きく成長しようという内発的な力を発揮することもあるものです。蛇が脱皮(だっぴ)をくり返  
しながら大きく生長してゆくように、人間も人格を陶冶(とうぎ)しよう(する過程)においては両方とも必要な  
のでしよう。自己の殻を打ち破って、はつらつと命が躍動したいように伸びてゆく軌道が、本来の「礼」  
です。そうした生命運動＝礼に回帰することが、「仁徳である」というのです。